

平成25年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	比較地域研究の新たなフレームワーク構築にむけて ーモビリティをめぐるマイノリティとジェンダーの諸相ー
------	---

研究代表者

氏名 橋村 修	所属 人文社会科学系人文科学講座	職名 准教授
------------	---------------------	-----------

研究分担者

氏名 吉野 晃	所属 人文社会科学系人文科学講座	職名 教授
菅 美弥	人文社会科学系人文科学講座	准教授
出口雅敏	人文社会科学系人文科学講座	准教授
水津嘉克	人文社会科学系人文科学講座	専任講師

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

プロジェクトの大きな目的は、本研究の目的は、モビリティをめぐる比較地域研究の新たなフレームワーク構築を目指し、マイノリティ・ジェンダーの諸相を学際的な見地から検討することであった。モビリティが人類史の常態であったという認識のもと、モビリティが日本、アジア、アメリカ、ヨーロッパの各地域のマイノリティやジェンダーをめぐる社会や文化全般に如何なる影響を与えてきたのか、比較検討した。

本研究が、モビリティを鍵概念に据えることは、移動する民のみに脚光を当てることを自動的に意味はしない。アジア系アメリカ研究を代表する、Lisa Loweが指摘するように、アジアにおける「ジェットマイグランド」「頭脳移民」「トランスマイグランド」など、グローバリゼーションのいわば「勝ち組」のモビリティが脚光を浴びる一方で、モビリティの両側面をみる視座、つまり移動しない人々、移動できない人々をも視野に含む必要がある。加えて従来からの地域間移動など、グローバリゼーションのなかで見落とされがちな、モビリティの多種多様な側面について、本研究は人種、文化、エスニック等のマイノリティとジェンダーの視点から理論的・実証的に研究を発展させるようつとめた。

5名のプロジェクトメンバーとゲストスピーカーの成定洋子(男女共同参画支援室)はそれぞれ研究会において個別の発表を行い、質疑応答を通して、上記の問題群について、またそれらを授業に反映するため如何に教材作成に活かして行くのか、議論を重ねていった。

吉野報告「ジェンダーを超える儀礼」では、従来のユーミエンの儀礼群が示す特徴とは異なるタイ北部で生じている新しい宗教現象を取り上げ、固定的宗教施設＝廟を建設、女性が祭祀者として儀礼を司祭している点、司祭執行が主に経文によるのではなく、即興的な〈歌〉によっていることなどの特徴を見出し、考察した。

成定報告「性産業従事者の「移動」を語ること」では、沖縄県における近年の警察や自治体、地域住民によって進められてきた歓楽街の浄化現場で交錯する売買春や性産業従事者、及び彼女らの「移動」をめぐる言説や表象が互いに相矛盾したものを包含しているという事態を踏まえ、「浄化」について検討を加えた。

菅報告「合衆国第一回センサスにみるマイノリティ」では、1790年に行なわれた合衆国第一回センサスにみられる、数的な面でマイノリティであったの「その他全ての自由人」に注目し、逸脱者、変則的存在として差別され監視されるマイノリティであったことを考察した。

水津報告「学芸大生の対外国人意識における「量的」分析の試み」では、対外国人への接触頻度や抵抗度に対して、別の変数がどのように影響を与えているかを検討し、被調査者の両親の学歴が、彼ら自身の対外国人意識に影響を与えている可能性について検討を行った。

橋村報告「くまびき・ないらぎ考」では、人々の「移動」の中で、魚の名前のような文化要素がどのようにアレンジされながら持続・変化したのか検討し、魚名が日本からハワイへ海を渡って「移動」したことを見出した。

出口報告「村落共同体とよそ者」では、フランスにおいて18世紀後期に大量に平地に向かって出稼ぎ労働者として移動を始めたガヴァンシュたちが、移動先の低地ランドック地方の村落共同体内でどのような存在として位置づけられていたのか、当時の訴訟調書(procès-verbal)を用いて考察した。

この1年間で、メンバーの人類学、民族学、歴史学、地理学、社会学といった見地から「モ

ビリティをめぐるマイノリティとジェンダーの諸相」について文字通り学際的な議論の遡上に載せることで、当初掲げた「比較地域研究の新たなフレームワーク構築にむけて考察」することへの共通理解の土壌が深まったといえよう。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

報告書（冊子）を作成した。報告書は、5人のプロジェクトメンバーによる論文とゲストスピーカーの成定洋子氏による論文の計6編により構成されている。